「コロンビアの悩み事と明るい未来

冨永雅久（2005~2007）
職種　品質管理

１．コロンビア共和国の概要

（１）　国旗・国章

コロンビアの国旗は横三色の旗で、上から黄色（幅は下の二色の２倍)、青色赤色。黄色は新大陸の豊富な鉱物資源、青色は新大陸を結ぶ大西洋と空、赤色は旧宗主国スペイン（革命で流された血）を意味するといわれますが、他にも黄色は「独立と正義」、青色は「高潔と忠誠」、赤色は「勇気と犠牲をとおしての勝利」を表すとも言われています。1819 年に大コロンビア（＝ コロンビア＋ベネズエラ＋エクアドル＋パナマ）を建国した際に制定され、その後 三カ国は分離独立したが、この国旗はそのまま引き継がれてきました。
（ベネズエラとエクアドルが 1830 年独立、パナマ 1903 年独立。）

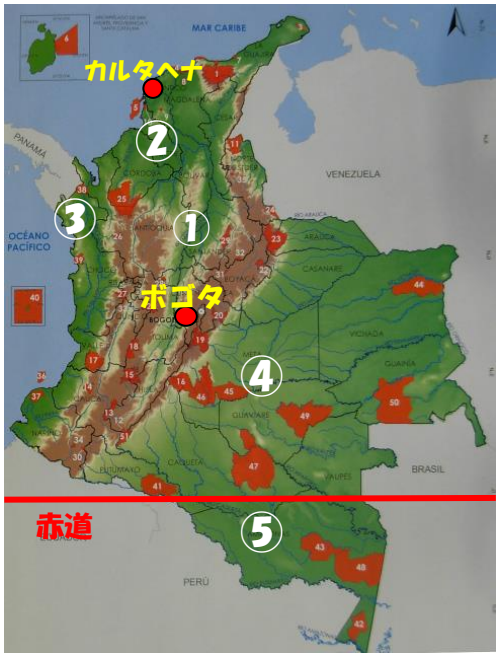
（２）　国歌

1920 年に公式に国歌として制定された。歌詞は、1880 年代に大統領を務めたラファエル・ヌニェスが現職時代に作詞しました。歌詞は、独立の喜びを高らかに歌っている。金管楽器の前奏で始まり、行進曲風に演奏される。歌詞の一節は次の通りです。
「・・・アメリカ大陸に『独立を』との叫びがひびき渡り／コロンブスの大地に勇気ある者たちの血が流れる／『国王は統治せず』とこだまする声／その偉大な目標のもとで・・・」

（３）　公用語：スペイン語、ラテンアメリカで最も正統的なものとされていて、コロンビア政府は法律を作って正しいスペイン語を守ろうとしています。

（４）　首都：ボゴタ　（正式にはサンタフェ・デ・ボゴタ)。

人口は 747 万人（2011 年推定)、アンデス山脈の東部の標高 2,600m の大盆地（南北 500km 東西 100km の世界的に珍しい面積）に発展した市。



（５） **面積**：国土面積：1,138,914 ㎢　（＝日本の 3.1 倍）

① 中央部の温暖な渓谷　・・・　コーヒーの栽培
② 熱帯のカリブ海沿岸　・・・　大規模な牧草地
③ パナマと接する地方　・・・　バナナの生産地
④ アンデス山系の東部　・・・　広大な草原(無人)
⑤ 南部・東南部のアマゾン川の上流・・・　熱帯雨林

（６） **人口**：4,551 万人（2011 年推定）

中南米でブラジル、メキシコに次ぐ大国。
平均年齢は約24歳。人口の68% が35歳未満の大変若い国（少子高齢化の日本とは大違い）。平均寿命：66.8歳（1980）→ 72歳（2000）。

人種：　混血の割合が南米で最高。(白人＋インディオ)が 1 位で約 60%。
体格は日本人とほぼ同じ位で、威圧感はなく親しみやすい印象。

（７） **宗教**：95% がキリスト教の カトリック。1991 年に宗教の自由を保障する憲法が制定されるまで、カトリックが国教でした。

（８） **独立**：1819 年スペインから独立。

（９） **通貨**：コロンビア ペソ。2007 年当時 1,000 ペソ＝約 50 円。

(10) **時差**：日本との時差は「－14 時間」。コロンビア朝 6 時＝日本午後 8 時。

(11) **政治**：立憲共和制、内閣は大統領が組閣。

議会：二院制（上院と下院、任期各４年)。1957 年～74 年まで「国民協定」の成立で、保守党と自由党の二大政党が交互に政権を握り政治が腐敗した。「談合民主主義」が 80 年代まで継続した。

(12) 産業：エメラルド産出量＝世界第 1 位、花卉輸出量＝世界第 2 位、
コーヒー（世界第 2 位、販売額 16 億ドル／年)、石油、石炭。
日本への輸出量：第 1 位 コーヒー173 億円（2004 年)、
第 2 位 鉄鋼（47 億円)、第 3 位 切り花（32 億円)。

(13) 鉱物資源：石炭は南アメリカ大陸の 60%がコロンビアにある。純度が高く、環境汚染物質が少ない。石油は新しく油田が発見され、輸出されている。コロンビアは自国の石炭・石油をエネルギー源としてあまり利用していなく、電力の 75%近くは水力発電所で発電されている。

(14) 医学：南米で最高水準。しかも医療費が日本と比較してとても安い。
青年海外協力隊の若い女性がコロンビア赴任して間もなく後歯列矯正を始める例が多いが､費用は 10 万円以下だそうです｡(日本の場合の約 1/10)

(15) 文化：インカやマヤ文明に劣らぬ高度な文化。優秀な金の細工（鋳造・打出し・溶接）技術が見られる。黄金博物館に下の写真のような黄金製の品々が 36,000 点展示されている。

(16) 日本からの移民事業：最も順調に行われた国。農産品の多角化、機械化農業を導入し、コロンビア農業の発展に貢献して表彰されて、地域社会の信頼を得ているそうです。

(17) マニサレス市（任地、マニサレス商工会議所で中小企業を支援活動）
1849 年 10 月 12 日 創立。人口 : 約 38 万人。面積 : 508 ㎢。海抜 : 2,150m。
尾根伝いに発展した都市。位置 : 北緯 5° 4′、西経 75° 3′。平均気温 : 18 ℃。
春夏秋冬の四季がなく、乾期と雨期だけ（最近その差がはっきりしない)。
一年中同じような気温なので、木に木目がありません。嵐がなくて風が穏やかで、細くてひょろひょろと背の高い木が目に付きます。
ボゴタから西方へ 268km に位置し、プロペラ機で 25 分。有視界飛行で、悪天候時は欠航となるので、ボゴタへの往復旅行では空模様が大変気になります。尾根伝いに一本の主要道路が走り、急な坂が多く 平地が少ない。
道に迷ったら、どんどん坂を上っていくと、その主要道路に出られます。

産業： 工業、農業、教育（大学の数が大変多い)・
農産物：コーヒー、砂糖、クエン酸、ユッカ、とうもろこし、豆、じゃがいも

1985 年 11 月初旬にコロンビアへ社用で出張し、到着して 1 週間後に、上の写真のルイス火山（5,200m）が噴火して、万年雪が溶けて土石流となって麓のアルメロ（マニサレス市と反対側に位置する）の街を襲い、約 2 万 3 千人が生埋めとなる大惨事が発生した。その丁度 20 年後に、この火山を望めるマニサレス市に 2 年間滞在することになろうとは、当時は夢にも思ってみない事でした。

２．コロンビアの悩み事

（１）コロンビアの首都ボゴタへの機中での出来事

東京からニューヨーク経由（1 泊）で、やっと首都ボゴタに着陸の 1 時間ほど前に、入国手続きのカードが配られました。難しいスペイン語の意味を隣席のコロンビア人に尋ねて、親切に教えてもらってカードに記入しました。その人は普段は家族と一緒にニューヨークに住んでいて、久しぶりの一時帰国で嬉しそうでした。その人が突然「シィー」と言いながら、膝かけ用の毛布を自分のリュックサックに詰め込み始めました。決して経済的に困るような生活レベルの人ではないのに、何故そんなことを・・・とショックを受けました。これはコロンビアの一般的な社会情勢を示す象徴的な出来事で、コロンビア滞在中に日本では普通考えられない様々なことに、出会いました。

コロンビアで中小企業の品質管理活動を 2 年間支援して 2007 年 11 月帰国しました。丁度 20 年前の現役時代に 2 週間出張したことがあるコロンビアを再び訪れて、そこでの生活を 2 年間体験できる大変貴重な機会に恵まれました。

外務省の海外安全情報では、ゲリラとの内戦、麻薬、強盗殺人、誘拐などで危険地域に指定されている国で、国民が明るい表情で生活している様子を見て、様々な異文化体験の中でいろいろと考えたことをご紹介します。

（2）乞食、ホームレス、難民

ラテンアメリカ諸国の中で、コロンビアは貧富格差が最も大きい国です。所得に応じた身分階級 （エストラート１～７）があります。大地主の頑丈で背の高い塀で囲まれたとても立派な家屋敷がある一方で、お粗末な家々が立ち並ぶスラム街があります。ゴミ箱を漁り物乞いをする乞食やホームレスの人々が街中で見受けられます。多くの農村住民が左派ゲリラや右派の準軍事組織、麻薬組織の暴力から逃れるため都市部に移住してきているそうです。

買物をしてお金を手渡そうとすると、横からぬーっと手が出てきて、その金をくれという仕草をされたことが数回あります。午前中のある時間帯には目の不自由な小柄な老夫婦が、いつも大通りの決まった場所に座って、金物を鳴らしている姿が今でも忘れられません。また昔の軍服を何着か持っていて、時々着替えては、手を差し出して歩いていた乞食もいました。よく稼ぐ乞食の収入は、公立学校の先生の給料よりも良いという話も聞いたことがあります。乞食も立派な職業という感じです。エストラートの低い（１～３）階級の人達は、税金が免除され公共料金も安く抑えられています。そのために十分な収入があるのにもかかわらず、あえてエストラートの低い地区に定住する人たちもいるそうです。貧しくてもアッケラカンとして、とにかく日常生活を楽しんでいて、外見的には明るい顔つきに見えます。

（3） 殺人、誘拐　コロンビア人の死亡原因の第１位は殺人。

コロンビアの殺人数および人口 10 万人に対する割合は、共に中南米諸国の中で最大で、中南米諸国で３人殺されたら、２人はコロンビア人であるといわれています。コロンビアは海外安全情報では危険国と認定されていますが、任地は JICA が安全であると判断して選定した都市なので、安全規則を守れば問題はありませんでした。とにかく安全な都市の安全区域を、安全な時間帯に安全意識を持って行動すれば大丈夫でした。でも外出時は常に油断大敵でした。安全な区域でも人通りの少ない夜間の一人歩きは危険、一方人ごみで混雑した会場や街路では、すりやひったくりなどの軽犯罪に要注意です。最初はかなり精神的な負担がありましたが、段々と意識的に安全行動することに慣れました。

年２回（２月と８月の上旬）、「安全対策連絡協議会」が首都ボゴタの JICA 事務所で開催され、安全に関する最新情報と繰り返し諸注意が与えられます。毎日の仕事で一番重要な義務は、事務所の係員へ安全確認のため、携帯電話で勤務と生活の状況を毎日連絡することでした（＝万一何か事件が発生したら直に連絡する訓練）。任地を離れて国内旅行する場合は、予め計画書を提出して、JICA 事務所の認可を事前に受けることが必要です。危険区域と認定されている場所は、例えコロンビア人の警護がついても絶対に立入り禁止とされています。

大変窮屈な思いでしたが、“安全第一”のため仕方のないことでした。そのよ

うな事情で、滞在中に旅行した都市は、カリブ海に面したコロンビア最大のリゾート地 カルタヘナ（巨大な城壁に囲まれ要塞化された旧市街の街並みがユネスコ世界遺産。最後の頁に写真を掲載）と、近隣のアルメニア（ボゴタやメデジンからの多くの観光客が休暇シーズンに来る保養都市）だけでした。

（４）麻薬問題、左派ゲリラ（麻薬を資金源とする）との内戦が深刻な問題

コロンビアは国際的麻薬取引を動かす中心地の一つで、麻薬取引による収入が正規輸出額の 25%～35%を占めるほどであったとのことです。
1985 年に出張したときは、丁度 M-19（1971 年に出現した左派のゲリラ組織、4 月 19 日革命運動）が最高裁判所を占拠する事件が発生しました。空港からホテルへ向かうタクシーの窓から、交差点の角々に銃口を上向きに構えた兵士達が分乗したジープが停車し警戒している光景を見て、また時々銃声が散発的に聞こえて、大変な国に来たものだと思ったことでした。麻薬の犯罪人を米国へ引き渡すことに賛成した 11 名の判事が殺害されたとは､後日知ったことでした。

昔選挙活動はしばしば暴力事件を伴ったため、現在でも選挙日の前日と当日は、スーパーマーケットの酒類の棚にはテープが罰印の格好で貼られて、販売は禁止となっています。コロンビアには、ゲリラ組織としてコロンビア革命軍（FARC)、国民解放軍（ELN）一方、右派のコロンビア自衛団連合（AUC)（準軍事組織）などがありますが、2002 年にウリベ大統領（任期 4 年）が当選してからは､「アメとムチ」で治安を回復する強い姿勢の政策によって、安全な都市や地域が増えてきています。現在は国民からの信頼が高く、再選禁止の憲法を改正して、2006 年には二期目の大統領に選ばれました。

（５）失業者：　失業者と半失業者（１週間の労働時間が 35 時間以下）を合計すると、2001 年末で 労働人口の約 46%に達したとのことです。

大学は学生に対して卒業後の就職先の世話をしないので、自分達で探すのが当たり前だそうです。若者にとっては就職難の国で、就職できるまでは家族が生活の面倒をみるそうです。仮に就職しても、若い間は短期間の試用期間の契約が多いそうです。商工会議所でも、数人の人達が辞めて行きました。

３．コロンビアの生活満足度は世界で第一位（2005～06 年世界価値観調査結果）

大変危険な国なのに何故？その理由を滞在中に撮影した写真を使って説明します。

理由１： ストレス発散の祭りが多い。

下の写真はマニサレス市の新年のお祭りで、中南米のミスカフェ（＝コーヒーの女王)コンテストが開催され､年初めの 10 日余りの間は大変な賑わいです。クリスマスシーズンの職場の懇親会では、朝の 10 時から夕方 7 時まで延々として９時間、飲んで食べて歌って踊って会話を楽しみます。夜のクリスマスパー

ティでは、翌朝の４時半ころまで踊りを楽しんだとのこと。とにかく一生懸命に遊ぶエネルギーは大変なもので日本とは大違いと大変感心したものでした。

新年のお祭り　パレード

ミスカフェ（コーヒーの女王）コンテスト

職場の懇親会パーティ

クリスマスパーティで踊りに夢中

理由２：　自然も豊か。多様性植物＝世界で第２位（ランの種類では世界第１位)。

写真やDVDにある国立公園などの自然の風景は実に種々様々で、美しいものが多いのですが、残念ながらJICAの安全規制で、訪れることは殆どできませんでした。下の写真はマニサレス市近郊の公園などで撮影したものです。右上の写真はお猿さんの顔のように見えます。左下の黄色の写真は、花の“ゆりかご”みたいです。

理由３： 支えになる家族の絆も固い。

両親がそろっていない家庭の割合が、日本の場合よりも多いように思いました。いわゆるシングルマザーの数も多く、それでも肩身が狭い思いをするのではなく、子供達を母親の家族全員で協力して守り育てるのはコロンビアでは当り前だと言います。一家族のメンバーや親類の間の団結力は、日本の場合よりも強いようです。

お世話になった商工会議所の理事の一家と親類

理由４：いつも状況を良い方に考える。（日本人には“いいかげんな”印象に）

一般的に中南米の国々では、約束や約束の時間を守らない人が多いといわれています。守らなくてもその次に出会っとき平気な顔付で、言い訳もしません。ある日に三人の人達と別々の約束をしましたが、それがすべて守られなかったことがありました。後日出会っても、まったく言い訳もないし・・。こちらの生活習慣に相当慣れた積りでいましたが、この日ばかりは さすがに考えこみました。時には腹が立っても、あきらめて「ここはコロンビア、コロンビア。何でもありのコロンビアだから！」と言っては、我が身をなぐさめたものでした。

コロンビアの観光案内の本に次のように記載されていました。

「何が正しくて、何が間違っているのかさえわからなくなってしまう混沌の世界がそこにある。また それでも何とかうまくやっている現実がある。いちいち悩んだり、怒ったりせずに、『まあ、それもいいか』と感じる様になると、途端にこの国は居心地が良くなってくる。・・・」まったく同感！

最初は 「文化の違い」 が印象的ですが、永く住んでいると「平均値的な程度の差異だけではないか？コロンビアにも日本にもそれなりの良さがあり、一概にどちらが良いとは言えない、やっぱり「喜怒哀楽のある同じ人間なのだ」という思いが強くします。異文化の中での生活で それが身に浸み込んでいくのをじっくりと待ちなら理解していく、その上で徐々に日本での風俗習慣と比較することが必要で、性急に批判しないことが肝心だと思います。

真に「いいかげん」なところが多いコロンビアですが、逆に日本では厳しすぎると思われるケースもあります。勿論ジェット機や新幹線の場合にはいいか

げんな運転は困りますが、日常生活ではそれほど厳格でなくても良いのではないかと思われることがあります。必要以上に厳格なことを要求すると、“虐め”に近い格好になります。

コロンビアの人々は明るく、良い意味で 「いいかげん」 。人生を楽しみ、生活満足度が高い。仕事以外も一生懸命にし過ぎる日本人も一考する必要があると感じました。

結論としては「好い加減」な「いい加減さ」が望ましいのではないか？

５．忘れられないコロンビアでの体験

（１）働いていた商工会議所では、朝の挨拶（これは日本でも当たり前)、昼食で帰宅する時、午後の就業時、夕方に帰宅する時、途中で事務所の外へ出かける時と帰って来た時と、実によく何回も挨拶をします。一日中挨拶をしている感じで、これも仲間同志の結びつきを確かめ、強めるための知恵なのかも知れません。これと比較すると、日本は挨拶が少ない感じがします。女性に対する挨拶では、頬にキスをする習慣がありますが、慣れていないので困りました。

（２）２年間働いていた商工会議所では、建物の改造工事が２階→１階→地下１階へと順次進められ、完了するまでに実に１年半かかりました。その間の騒音と塵埃のひどさは大変なものでした。日本では仮事務所に転居して仕事をするのが普通ですが、こちらではこういうことに耐えて仕事をするのが当り前のようです。住んでいたアパートの近くにある古いカルダス大学病院の解体工事は、日曜日の朝でも５時半頃から大きな音を出していました。週末には隣近所のはた迷惑も気にせずに、大きな音楽と踊りで馬鹿騒ぎをするなど、一般的にコロンビアの人達は、騒音に対して大変寛容であると思います。

６．品質管理の支援活動（赴任先：マニサレス商工会議所）

商工会議所のメンバーである中小企業の会社を訪問して、各社の品質管理活動を支援しました。商工会議所としては、JICA のシニア海外ボランティアを初めて受け入れた事情もあって、どういう観点からどのようなプロセスで支援する会社を選定するのか悩みました。商工会議所が折角選んだ会社も、何の問題があってどう支援してもらいたいのか、改善テーマと問題の内容が不明でした。工場を視察後テーマと改善の計画案をまとめて先方に送っても、一向にそれに対する反応がなく、数か月してから結局中止という辛い事例が２社ありました。提案の内容は検討用で、もし先方の意向に合わない計画であれば、話し合って計画をいくらでも修正する積もりでした。何の意思表示もなく止められると不安な気持ちになり、為す術がありませんでした。この辺りの状況は日本とは大違いで、どうしても納得し難いものでした。

２年目は、支援する会社を効率的に選定するプロセスを改善し標準化し、最初に支援要請書、会社概況、品質管理状況などを準備する規程を作成しました。

支援活動のテーマは、下記の三つの中から選んでもらいました。

（１）製品の品質問題（不良品）の原因究明・解決と再発防止対策の徹底。

（２）職場の社員が参加して行う改善のための小集団活動の導入と推進。例：品質改善（QC）サークル活動、5S（整理・整頓・清掃・清潔・躾）活動。

（３）品質マネジメントの国際（ISO）規格に基づく品質管理システムの確立。

初年度は（5+1）社、次年度は新しい 4 社＋継続 3 社に支援活動を行った。

指導期間は、１年目は原則として一社あたり長くても６か月間としました。品質管理担当者には若くて魅力的な女性技術者が多いのは嬉しいことでしたが、日本とは違って経験年数が少ないので、２年目からは問題が解決しても、その管理体制が整備され改善の状態が定着するまで、支援し続けることにしました。コロンビアでは、大学を卒業した優秀な技術者は良く勉強していて、実に理論的な知識は豊富に持っていますが、それを現場で実際に応用した経験が少ないのが実情でした。また現場の作業者達に品質管理の基本を教えることもしていない。その結果国際規格（ISO）に基づく品質マネジメントの認証を取得しても、その内容が理解できている人達の数は、社内で数人だけという話を聞きました。“全員参加”で品質管理を推進することが必要不可欠ですが、この観点からすると是非とも改善すべき大きな問題でした。

一方日本では品質管理を図や漫画などを使って易しく解説した本や参考書が数多くあり、恵まれています。現場の作業者達はこれらの本をよく勉強して、実際に活用した経験も豊富で、改善発表会や工場見学などでお互いに情報交換に努めます。しかしコロンビアではこのような参考書がないので、この機会に日本科学技術連盟が発行したテキストの英語版をコロンビア人にスペイン語に翻訳してもらい、ここから抜粋した文章にイラストを入れた研修用の易しいテキストを作成しました。

あるＡ社では、各職場のリーダーを集めて小集団改善活動の進め方を説明し、このリーダー達で一つのモデルサークルを結成し、改善活動を展開した。その結果を社長の前で発表し、その成果を評価して社長が全社的にこの活動を推進していくことを宣言してくれました。この改善活動を体験したリーダー達が各職場に戻って、リーダーとして各職場でサークルを作って、改善活動を実施するように工夫しました。

帰国する１か月前に、商工会議所で「相互啓発のための改善体験発表会」を開催して、お互いに他社の改善の進め方、発表の仕方を勉強し合う場としました。最後まで付き合ってくれた会社（６社）が、発表に参加してくれたことは嬉しいことでした。あまり上手くいかなかった会社の例では、JICA のボランテ

ィアが全て改善してくれるものと思い込み、自らは行動しようとしない担当技師もいました。議事録で役割分担を明確にした積もりでしたが、議事録を書いたらそれでおしまいの姿勢には困りました。

小集団改善活動の方を各職場のリーダーに説明（社長も同席して）

モデルサークルの改善成果を発表し、社長が各職場での推進を宣言

現場に入り込んで作業者達と一緒に品質管理を実際に行いながら教えていくことこそが、シニア海外ボランティアが支援できる最も価値ある仕事と思います。この活動が継続的に自分達の努力で発展していけるように、大企業や中小企業の人達が協調精神を持って、力を合せて相互に啓発し合う（刺激し励まし合う）ために、品質管理活動の研修・実行委員会などの「組織作り」をすることが、今の願いです。

７．　治安の改善とＶ字形回復で明るい未来へ

アルバロ・ウリベ政権（2002 年 8 月～）は治安回復を重点課題とし、反政府グループに強硬姿勢の政策をとり、ゲリラによる破壊活動が減少した。人口 10 万人当たりの殺人数が 1994～97 年の年平均は 73.3 人→2003 年 約 50 人（86 年以来の最低）と大幅に減少した。（日本は自殺者数が過去 13 年間 3 万人／年を超えていて、コロンビアの殺人数より多いのです。日本は安全か？）

誘拐人数は 2002 年 2,986 人→ 2003 年 2,043 人→ 2005 年 800 人。
大統領連続再選を可能とする憲法改正を提案、2005 年 10 月憲法裁判所が承認。
2006 年 6 月憲法改正後ウリベ大統領が再選され、新自由主義経済政策を引き継いで、緊急財政、民営化の推進・・・積極的な構造調整を行った。

二期にわたるウリベ政権の成果：

① GDP 成長率：8 年間（02～08 年）の 年平均 4.9%。
② 国民一人当たりの GDP：02 年 2,247 ドル→09 年 5,087 ドル。
③ インフレ率：7%前後 →09 年 2%へ下落した。

コロンビア革命軍（FARC、1964 年結成）が、一時は国土の 3 分の 1 を支配していて、約 2 万人の勢力があった。2002 年以降ウリベ前大統領が米軍と共同で強力な掃討作戦を展開した結果、8 千人 にまで減少した。

④ テロ事件： 02 年 1,645 件 → 07 年 387 件
⑤ 貧困率 ： 02 年 49.4% → 11 年 34.1%

2010 年 6 月前国防省大臣のサントスが大統領に就任、前政権の政策を継承中。

今後の課題

(1) 国家予算の半分を占めるゲリラ対策費を減らして産業振興に転用する。

(2) 治安が回復すれば、豊かな観光資源と資源で、海外からの観光客や産業投資などで外貨取得に役立てる。2006 年に 150 万人の観光客が入国、これは前年比 50%増に相当する。

(3) 昔、経済危機、失業増、暴力を伴う治安の悪化から海外移住者が急増したが、これらの優秀な人材が祖国に復帰すれば輸出産業の発展に貢献できる

1997～2002 年経済的理由で出国した人：62 万 1,500 人。
（移住先：ベネズエラ 44.2%、米国 38.8%、スペイン 4.6%）。
2002 年現在 海外在住のコロンビア人： 520 万 8,548 人。

JICA シニア海外ボランティアの人数も、2005～2007 年ころは 7～8 人位でしたが、2013 年 1 月現在では 21 人が支援活動中で、JICA も注力中です。

８．まとめ

シニア海外ボランティアの世界 は、“ドキドキわくわく”の緊張と希望の世界だと思います。日本では到底経験できないことや、初めて経験することも多くて、戸惑うこと、ときには難しくて辛いこともありますが、数多くの方々のご支援を戴いて、解決することができました。大きな楽しみと喜びがある充実した２年間という思い出があり、お世話になった人達に感謝しております。

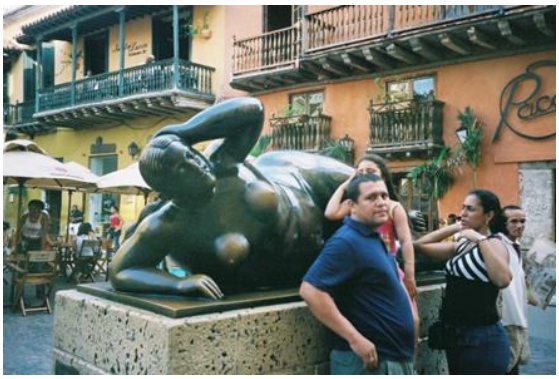
支援活動は Give, Give, Give & Give・・・の連続で、一生懸命の努力をすることが自分自身の勉強（=Take）になりました。
「自分の喜びはみんなの喜び、みんなの悲しみは自分の悲しみーこれがボランティア精神の基本です」　　牧宥恵　（まき　ゆうけい）真言宗　総本山　根来寺
沢山の人達（コロンビア人＋日本人）との新しい出会が生まれ、新しい世界が開けて来ました。今後共ボランティア活動に関心を持ち、直接的にまた間接的に支援を続けていきたいと思います。
帰国してみると、製品や食品の偽装問題、事故米、通り魔事件、ひき逃げ事件、放火事件、派遣社員の大量解雇 等々のニュースの連続で、日本も格差社会になり、何でもありの国になってしまうようで、実に残念でなりません。

世界遺産カルタヘナは 海賊から守るため構築された城壁で囲まれています。

カルタヘナのサン・フェリペ城塞

世界遺産カルタヘナの城壁内の風景

17～18 世紀の植民地時代の旧市街



ボテロの彫刻と観光客の公園内風景

（おわり）